

[年度] 平成27年度和歌山県農林水産試験研究成果情報

[成果情報名] スプレーギクの冬季における加温コスト低減技術

[担当機関名] 農業試験場 栽培部

[連絡先] 0736-64-2300

[専門分野] 花き

[分類] 普及

[背景・ねらい]

冬季におけるスプレーギク生産では、生育ステージにあわせて15℃～18℃に加温しながら栽培が行われています。しかしながら、近年、重油価格の高騰が続いたことから、加温コストの削減につながる生産技術の開発が重要となっています。そこで、低温管理下においても、到花日数が短く、切り花品質に優れる品種を選定するとともに草丈伸長や開花促進効果をねらった挿し穂の冷蔵技術の開発を行います。

[研究の成果]

1. 慣行の栽培夜温（15℃～18℃）より低い13℃および15℃で栽培した場合、‘ふわり’、‘フラゴナール’、‘パニティ’、‘ミケール’および‘デックモナサニー’において、到花日数が56日以内であり、上物の切り花の割合が高くなることから、これら5品種が低温管理下での有望品種と考えられます（図1）。

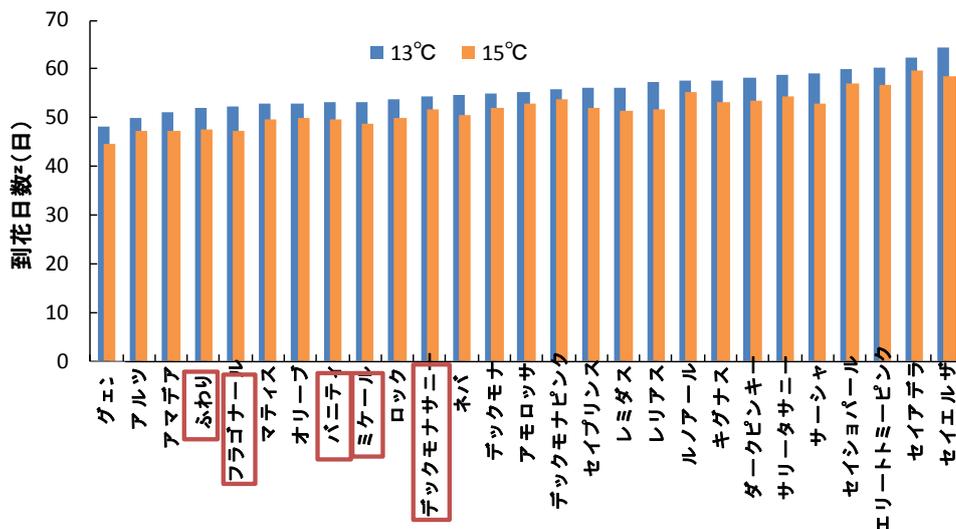


図1 栽培夜温とスプレーギク品種の到花日数

注) 平成25年12月13日直挿し、26年1月23日消灯、17:00～7:00は13℃または15℃、7:00～17:00は10℃以上で栽培

※ 消灯から開花までに要した日数、□で囲った品種は、到花日数、上物率から判断して有望と考えられた品種

2. 挿し穂の冷蔵処理による開花促進効果には、品種間差異が認められ、‘レーガンエリートピンク（以下エリートピンク）’等では、冷蔵処理により開花が早まります（図2）。また、冷蔵処理により消灯時の草丈が高くなる傾向が認められます（データ省略）。
3. ‘レミダス’、‘エリートピンク’では、挿し穂を5℃で31日間冷蔵すると、

開花が最も早くなります（図3）。

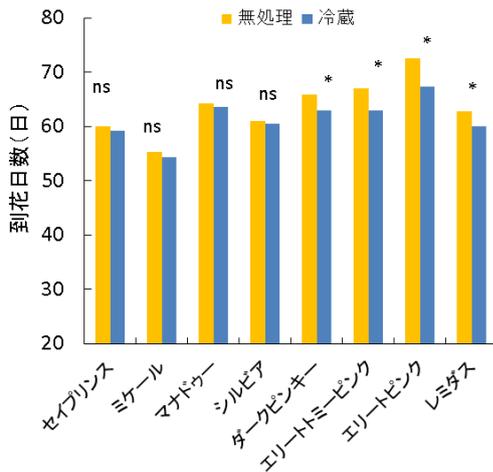


図2 挿し穂の冷蔵処理がスプレーギクの開花に及ぼす影響

注) 平成26年11月5日定植、12月5日消灯

挿し穂の冷蔵は25日間

nsはt検定において5%レベルで有意差なし、*は有意差あり

4. 挿し穂の冷蔵処理による開花促進の効果は、1~2月開花および3~4月開花の作型において同様に認められます。また、挿し穂を冷蔵することで、慣行の夜温よりも2~3℃低温で管理しても開花の遅れは小さくなります（図4）。

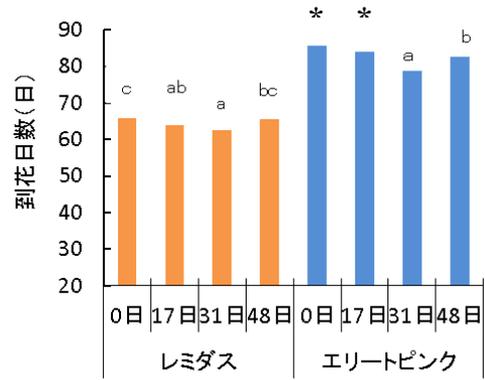


図3 挿し穂の冷蔵期間がスプレーギクの開花に及ぼす影響

注) 平成25年11月5日定植、12月6日消灯

同一品種内異なるアルファベット間に

Tukey-Kramer法により5%レベルで有意差あり

*は未開花株があるため統計処理なし

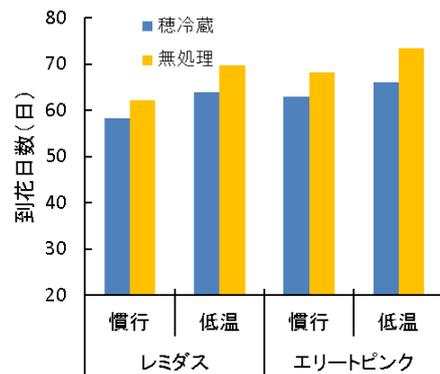


図4 栽培温度と挿し穂の冷蔵処理がスプレーギクの開花に及ぼす影響

注) 平成27年11月6日定植、12月7日消灯

栽培夜温は慣行：15~18℃、低温：13~15℃

[成果のポイントと活用]

1. 冬季における低夜温（13~15℃）栽培を行う際の品種選定の参考になります。
2. 挿し穂の冷蔵処理により、栽培期間が短縮されるとともに低夜温栽培においても開花が促進されるため、加温コストの低減につながります。

[その他]

予算区分：県単（農林水産業競争力アップ技術開発事業） 研究期間：平成25~27年

研究担当者：宮前治加、前川真穂、濱中大輝

発表論文等：なし

ホームページ掲載の可否：可